
優勝校インタビュー

第15回(2010年度)ディベート甲子園 中学の部 優勝 岡山白陵中学校
顧問 後藤文昭先生

——もう全然違います。着想が全然違います。見えているものが違う。——

——ディベートを経験して、自分の授業スタイルは変わりました。——

——(他校の教員にディベートを薦めますか?)絶対おすすめします。——

今回は2010年度全国大会(ディベート甲子園)中学の部優勝、岡山白陵中学校ディベートチーム顧問 後藤文昭先生にお話を伺いました。

**インタビュー(以下太字ゴシック体): 今日
は貴重な時間を本当にありがとうございます。
どうぞよろしく願いいたします。**

こちらこそよろしく願いいたします。
いやいや私なんかよりも適任な人がいるの
ではと思うのですが、気がついてみればデ
ィベートを始めてからもう10年くらいに
なるのですね。

**その10年を振り返って、ディベート活動
に携わっての全体的な感想をお聞かせ頂い
てもよいでしょうか。**

ディベートに出会ったのは同僚の国語の
先輩教員に誘われて、当時の神田外語大に
見学に行ったのが最初です。そうしたらね、
すごかったんですよ。

今でも覚えている試合があります。福岡
教育大学小倉中さんの試合があって、その
選手の方々のプレゼンテーションの印象が
非常に大きかった。中学生の子が、こんな
プレゼンテーションをするのかと。その感

動は大きくて、うちの学校の子たちにもや
らせてみたいと。そして帰って協議して、
やることになったのです。

やっているのは私一人ではありません。
そして、私もチームの一員として一緒に活
動している感じですね。生徒にとってちょ
っと難しい、背伸びをさせないといけない
資料なんかは、自分が先に読んで、簡単
に講義のようにすることもあります。

そうやって関わっているうちに、いい意
味で、次のステージを生徒が垣間見るよう
なことが起きてくる。たとえば中学生が新
書レベルの本を読む、あるいは高校生が、
大学生、大学院生が読むような文献を読む。
そういうものにある程度接する機会がで
きる。普段の世界を超えて、次の世界に接
する。窓や風穴を開けるような、そこから次
の世界を見る機会、それはとても貴重な経
験だということを感じます。

**資料について必要に応じて先生から講義を
受けられるというのは、生徒の方にとって
はとても有意義な機会なのではないでしょ**

うか。

そうだといいですね。「ちょっと今日はい資料があったよ」と持っていく感じです。というかね、私が勉強になるんです(笑)。毎年毎年。

私自身は地歴の教員なんですけど、遺伝子組み換え食品の論題の時は本当に苦労しました。あと派遣労働の論題の時も苦労しましたね。法解釈とか、判例とか、調べる必要が出てくるわけです。そういう風に、毎年違ったチャンネルの論題をやって、自分自身が毎年違った角度で勉強になっている。勉強させてもらっている。

先生にとってもディベートというツールは有意義であったと。

もう全然違います。着想が全く違います。見えているものが違う。

物を見る視点は確実に変わりました。たとえばリンクマップの視点(※注)。

リンクマップを書きながら、発生過程や因果関係を結び付けていくという考え方は、教師をしているうちはなかなか出てこない。しかしディベートを始めてからは、あの方式で考えるようになった。

東大の論述を指導しなきゃいけない場面なんかもあるんだけど、「この発生過程をちゃんと書くんだよ」ということや、重要性に順位をつけて考えることとか、自然とできる。

そして授業の進め方も変わってきた。授業って、「生徒の説得」だと思っんですね。

こう考えて、こう説明すればいいかな、とか。生徒がまるでジャッジに見えてくる。

この子を説得してみよう。と。「ああ、それだったら納得できるよね、あなたの説明でね」と言わせたい(笑)。

(※インタビュアー注：リンクマップ…立論や反駁の議論を組み立てる際に、論理構造を明確にするためにフローチャートのような図を使用する、ディベートでよく用いられる技法)

生徒さんにとっては、ディベートを始める前と後ではどう変わるのでしょうか。

実は、インタビューを今回受けるということで卒業生に聞いてみたんです。(※インタビュアー注：ご本人の許諾を得て転載)

Wさん(現在は医学科1年生) / 第一反駁

ディベートを通して自分が大きく成長したなあとと思う点を挙げるなら立論では主張を論理的に組み立てる能力が身についたと思うし、反駁では、相手の言葉から要点を素早くひらいて、短時間でそれに対応するレスポンスを考えることで、ざっくり言えばコミュニケーション能力なんだと思うんですけど、会話の中で相手の意図をより深く汲み取れるようになったような自分の方もより端的な表現をできるようになった気がします。

それと集中力ですかね。これは物凄く大きなものを得たと思います。

他にはディベートの本質からは少し外れますが、チームでひとつのことをやるという点では、友情とか協調性とか色んなものを得ました。

よくケンカしましたしね 笑

あとは、変な話ですけど、高2で負けた時の悔しさみたいなのが本気だったから味わえた感情だとか、それまで結構ぐだぐだと生きていたので、ああいう感情を経験したのは今思えば良かったなあとか思ってます。

Iさん（現在は医学科1年）・質疑担当
〈全国大会に参加して〉

- ・最高レベルのディベートを見られる
- ・強いチームと直接戦うことで成長出来る
- ・高校はとにかくレベルが高い
- ・半年にわたり夏に向けて論題にがっつり向き合い、知識や考えを深めることが出来た
- ・論題が日本の抱える問題にタイムリーにスポットを当てている
- ・ディベートの神様のような方に試合を見ていただけ、アドバイスももらえる
- ・全国の進学校の生徒と交流できる
- ・能動的に自分から学ぼうとする者達の凄さを実感できた
- ・井の中の蛙だった自分が大海を知れた
- ・極限の緊張の中で精一杯力を出す訓練になった

〈ディベートで成長できたこと〉

- ・物事の要点を早く見極める力が身に付いた（←勉強において全科目に非常に役立った）
- ・両方の立場に立って物事を考えるようになった
- ・社会への関心や知識アップ（←脳死移植について個人的に調べたことが面接で役立った）
- ・自分で客観的に分析、熟考する習慣がついた
- ・集中力、度胸、冷静さが身に付いた！
- ・自信がついた！ 笑

自分が面接で感じたことは、簡潔に、根拠付けて、分かりやすく話す力、そして、様々な面から物事を見る力や発想力、この場で試験官が求めているのは何かを冷静に考える力などがついているな…ということでした。

この医大に行った子は当然面接を受けているのですが、「根拠を付けて簡潔に分かりやすく話す力」、「両面から物事を見る力」、そして、「その場で試験官が何を求めているのかを考えることができた」と語っています。全員が全員そうというわけではないけ

れど、教室の中で得られる勉強を超えて、圧倒的に成長していますね。ディベートがなければそこまではなかったと思う。

そして、私の中で印象に残っているのは、ややおとなしい感じの生徒がいたのですが、その子がディベートに触れたことをきっかけに、人前で話すという機会を得た。それからどんどんと変化し、生徒会の副会長として、全校生徒をまとめていく、引っ張っていくような役割を果たすまでになった、ということもあります。

あと、生徒は自分たちで言わないのですが、私から見て一番伸びたと思うのは、……えっと、ディベートって、「人前で話す」ということが強調されがちですよ。

ですね。

でもね、やっている人は、生徒も先生も、みんな分かっているんです。「いかに聞かか」というのが実はものすごく大事な要素なんだということ。

たとえば立論の4ないし6分間、相手が何を言っているのかというのを最高の集中力で聞かないと、その後試合にならない。質疑も反駁も何もできやしない。相手の言わんとすることを適切に聞けなければ、何もできない。

私自身の思う、一番伸びている力というのは、聞く力だろうと。

それが発揮されるのが授業であっても、面接であっても、要は何が大事なのかを聞き取る力というのは、ディベートを学ぶことによって全然違ってくると思う。個々人が学び取るものというのは色々だけれど、その個々の壁を越えて、みんなに共通して

言えるのは、一番違うのは、そこ(聞く力)だと思います。

個人の成長のほかに、10年の中で、全体として変わってきたこともあります。最初の頃は「言ったのにジャッジはとってくれなかった」「ジャッジが悪かった」というような言葉が飛び交っていたのですが、今は、「ジャッジにとってもらえなかった自分たちの説明は何が悪かったのか」と考えるところまで成長しています。

先生におっしゃって頂いた聞く力をはじめとして、長期的に見て中高生がディベートを学ぶことにはどのようにメリットがあるのでしょうか。特に、他の活動に費やせたかもしれない時間を、その時期に、あえてディベートに投資することのメリットというのは。

最初に申し上げたことにつながるのですが、そもそもディベートをやろうと思う子というのは、ある種知的な活動にとっても興味がある子なのですよね。その子たちというのは、勉強もできるし、将来は大学に行き、何らかの専門を身につけようと考えている、そういう期待を自身に持っている子だと思うんですけど、その子たちが次の世界を垣間見ることができるというのは、大きなメリットだと思う。

近い将来に触れることになる、より深い世界、具体的な選択肢の中の未来。

そうです。遺伝子組み換え食品の論題の年だったらサイエンス系の雑誌をみんなで読んだし、派遣労働のときは、「実は大学や

大学院に行くと、こういう雑誌を読むんだよ」、とって「ジュリスト」を見せたりした。そういう、一般教養レベルをちょっと超えた、次のステップを、次にどんな世界があるのかを見にいくことができる。

あと、育つ力としてもう一つ大きいのは、リサーチです。

立論を作るとき、自分たちが言いたいことを言うための資料を探す。この時必要な力というのは並大抵のものではない。関係ありそうなものをば一つと集めてきて、それでも使えるものは10分の1くらいしかない(笑)。そういう集め方の感覚、使い方の感覚が分かる。

学術論文を書くときの作業は、まさに立論作成そのものですね。

そうですね。文系の子でも、卒論を書くときの第一歩ですよ。文献を集めるというのは、ディベートで、どう探せばいいか、どこにいい文献が眠っているのか、というのを嗅ぎ分ける感覚ができる。あと、このごろはインターネットで手軽に検索することが多いわけですが、東大文Ⅱに行った子は、「やっぱり大事なものはインターネットより文献ですよ」と語っていました。

ところでここは多くの保護者や教員の方が気にするところだと思うのですが、受験との兼ね合いでメリット・デメリットはありますでしょうか。

先ほど述べた発生過程の考え方がありま

すね。

これは学問の根本に通じることだと思うのです。

どのように物事が発生し、どのようなステップを経て、結論に至るのかというプロセス。

しかも、これを相手にわかりやすく伝えるということがディベートでは要求される。

これは数学での証明のプロセスの提示にも似ているし、文系の論述では、出題の題意を的確に把握して、そしてステップを踏んで、結論を伝えていく。そういう一連の考え方、フレームワーク、着想が、ディベートの練習や試合を何回も何回も繰り返していくうちに、頭の中に定着するんじゃないかと思うんです。

ある命題がある時に、そのメリット／デメリットってなんなんだろう。それがなぜ大事なんだろう。あるいはそれを問う相手の求めているものは何だろう。そう考えていくことが自然に身についていく。ディベートを学んだ子とそうでない子とでは、生徒の见えている世界が違うのではないかという印象があります。同じ授業を受けていても、「あ、説明が飛んだな」とか「なぜそういえるのか」と分かるような。

一方、デメリットとしては、やはり時間です。

部活は、たとえば、バスケ部だったら通常、家に帰ったらもう活動するということはないわけです。けれども、ディベートは帰宅してからでも、どこまででもできてしまう。気になったらずっとネットで調べられるし、反駁カードを作ろう…とかやっていると、平気で2時間3時間たってしまう。ある意味麻薬的なところはあるかもしれない。

い。生徒がやりすぎてしまっていると思う時は、「本業は勉強ですよ」と言って、ストップをかけたこともありました。全国大会の時も、「負けたら勉強だ／宿題だ」と言って、道具を持っていかせています(笑)。高校の方の部活も、高2の夏で引退ですね。

受験というと保護者の方の視点も出てくると思うのですが、今のところは保護者の方には好意的に受け止めてもらえています。おそらく、ディベートが知的活動につながっているというのが大きいと思います。

たとえばうちの学校は医学部志望の人が多いのですが、たとえば去年の安楽死論題は、それが面接の質問そのもののような論題なので、それが役立ったという声があります。そして面接では、医学以外にも社会問題的なことを結構面接で聞かれたりする。そこでディベートをしていると引き出しができています。そういう知的素材を扱うということが、保護者の方の理解を得ているのではないかと思います。

では今度は教師の方にとって…、ディベートを導入すべきかどうか考えている、迷っている他校の教員の方がいたら、やはりディベートを薦めますか？

いやもう 120%薦めますよ。絶対おすすめします。

たしかにディベートってちょっと敷居が高いんですよね。

難しいとか、分からないとかいう印象があるんですけど、考える前にやった方が早い。何より生徒の伸び率は本当に高いです。たとえば、中学生とかは普段仲間と話

すことはもとより、授業でみんなの前で話すなんてのは、僕らが思っている以上に緊張する。それが、限られた時間の中で、みんなの前で、勝敗をかけて言うべきことを言うって、ものすごい負荷です。そして苦労が多い分だけ、生徒の伸び率が高い競技だと思います。

他の課外活動……野球も音楽もすごいんですが、ディベートは、教育活動として、生徒を伸ばしてあげることができる経験として、10年くらい関わっているから言えるのかもしれないけれど、もはや比べられる対象がないのです。絶対お勧めします。

教員にとっても、私自身の経験でいうと、ディベートをやることで自分スタイルが変わったと思います。常に「どう言ったら生徒に伝わるのか」というのを考えるようになった。そして、頭の中にフレームワークができる。授業の全体のストーリーの作り方とか、論理的なプロセスとか、これは伝えなければいけないとか、そういうことを日常的に考えられるようになってきた。

ディベートを経験することによって起きた先生のスタイルの変化というのは、歓迎すべきことだったのでしょうか？

自分にとっては歓迎すべきことでした。具体的に言うと、私の場合地歴の教員ですが、講義がメインで、今までは、一方的にこちらがしゃべって、そしてその後何人かに当てて、答えさせて終わり、という一辺倒なことしかしていなかったのです。

それが、変わった。たとえば、問題を投げかけた後で、ある生徒に論述の解答的なことを書かせて、それを受けて、生徒たち

に問いかける。「この人はこうとらえたけれど、みんなどう思う？」とか、「この部分、どうだろう？」とか。そういう、対話をしていく、一緒に考えていく、アドリブ的な授業をするようになりました。そしてそういう教え方をすると、生徒が圧倒的に活動的になる。楽しそうに授業を受ける。そして「情報交換タイム」といっているんだけど、あるところで壁に当たって分からない、となったら、何でもいいからみんなまで話してごらん、と。そしてそこでどんな話題が出たかをみんなに話してもらうとか。それがディベートを始めてからやるようになったスタイルです。それまではやっていませんでした。

これは、放課後にディベートの活動を生徒たちが話をしながら、議論をしながらやっている姿を見て、これを授業でやったらおもしろいな。と思ってやったことなんですよけれどね。みんなしているかもしれませんがね。これくらいのことは(笑)。でも自分は、ディベートをやってから、そうするようになりました。アドリブにも対応できる。

貴重なお言葉の数々、本当にありがとうございました。

最後に、これは伝えておきたいな、ということがありましたら、ぜひお聞かせ頂けますでしょうか。

これはそんなに目立つ視点ではないかもしれないけれど、ディベーターにとって大きいと思うのは、ジャッジの存在です。ジャッジの人の話って、勝敗とは別に、大きいですね。自分たちが一生懸命考えた論理や主張が、大人の視点から見てどう評価

されるのか、その講評の中に、生徒にとっての宝物がたくさん含まれていると考えています。ジャッジの方の話には、生徒は耳を真剣に傾けています。

あとはチームの観点です。人数が増えると、実際にはスピーチをしないメンバーの役割がすごく重要になって来る。自分のチームの議論を聞きたいけれど、チームの勝利のために、他にあってフローとって、情報活動をする。そういう役割分担と、その評価をちゃんとすることはとても大事だと思います。「誰のおかげで勝てたと思う？」とね。一番の理想は、お互いの役割を認め合い、貢献をたたえあえる夏にすることです。

今回のインタビューでは、学校へのディベート導入という最初の段階から、多くの優秀な卒業生を送り出すまでを見続け、今も現役で指導されている後藤先生からの貴重なお言葉の数々を頂戴しました。

(インタビュアー 志村)

そして最後に……大会に出て、生徒がよく言うのは、「大会に行くときすごい子が見れる。この言葉が何で言えるの。私たちがあんなに頑張ってもできなかったのに。どうやったらあの言葉が口をついて出てくるのか。すごい」と。そして、怖さを知る。生徒が言うんです。「先生もう足がふるえました。怖かったです」と。普段日常生活の中でそういう怖さって体験できない。

僕のところは最も田舎の学校だと思っているのですが、東京に出てきて、すごいところと対戦させて頂いて、帰りの新幹線で、生徒たちから「あれすごかったよねー」というのがいっぱい出てくる。すごい知的刺激です。